

家に帰ろうよ。

23

死に向き合いきれずに

愛媛県の松山空港からタクシーで10分ほどの住宅街に、医療法人「ゆうの森」が運営する「たんぼぼクリニック」はあった。2000年に開業した四国初の在宅医療専門クリニックだ。

「家」で看取ると「どう」とは理事長の永井康徳医師(53)らが作った。全国の医療機関の研修などで利用されている。

「若い頃、へき地医療に携わってましてね...」。部屋に通された私たちは永井医師の話に耳を傾ける。

「若い頃、へき地医療に携わってましてね...」。部屋に通された私たちは永井医師の話に耳を傾ける。

「最もは病院がいい。病院にしようと思う」と。

「昔はね、『ごはんが食べられなくなった』と言えは、『それでいいのよ』と応えてくれる人が周囲にいました。今はそうはいかない。人間はどうやって亡くなっていくのか、死期が近づくとどう変わっていくのか。分からないと不安になりますよ」

「昔はね、『ごはんが食べられなくなった』と言えは、『それでいいのよ』と応えてくれる人が周囲にいました。今はそうはいかない。人間はどうやって亡くなっていくのか、死期が近づくとどう変わっていくのか。分からないと不安になりますよ」

「意見、ご感想をお寄せください。手紙は、〒650-8571(住所不要)神戸新聞編集委員会「いのちをめぐる物語」係まで。ファックスは078・3660・5516へ。メールアドレスは、inochi@kobe-np.co.jp。取材させていただくこともありますので、できれば連絡先を記してください。」

永井医師は20年ほど前、愛媛県明浜町(現・西予市)で診療所長を務めていた。半農半漁のまちだ。

当時の患者に、肝臓がんの男性がいた。病院で「1カ月

この体験をきっかけに、永井医師は在宅医療について考えるようになる。キーワードの一つは「不安」。先の肝臓がんの男性のケースのように、家でみとるのは不安、だから家族は病院を選ぶ。

「意見、ご感想をお寄せください。手紙は、〒650-8571(住所不要)神戸新聞編集委員会「いのちをめぐる物語」係まで。ファックスは078・3660・5516へ。メールアドレスは、inochi@kobe-np.co.jp。取材させていただくこともありますので、できれば連絡先を記してください。」



職員が作ったはり絵の前に立つ永井康徳医師。「医療は時代によって変わっていく」という=松山市

シリーズ「いのちをめぐる物語」第二部

9/4(水) 神戸新聞 夕刊分
新しい家族の姿、生活のあり方です。
仕事とともに、どう支える時間を作っていくか? 大変な時代です